くねり坂

「じゃ、また来週、ごちそうさまでした」
と良雄の腕にぶら下がるようにしてでていった。
球子の足が震えた。支払えなかったらどうしようと、冷汗がでてくる。手渡された細長い勘定書きは、深呼吸をしてやっとみえた。財布の中身全部をだして支払いを終えた。
ステーキ屋をでて乃木坂を昇ると、くねり坂が遠くにみえた。千秋のマンションから「東京マッサージ」に電話を入れなかったから、球子を心配して電話の前でため息をついている泉の顔が浮かんでくる。
くねり坂の下にでた。この坂を登れば、体を丸めてうずくまっているような「葬涯」がみえる。
今夜はひどく体が重い。
坂の真中で球子は立ち止まる。心臓の動悸が激しくて息が止まりそうだ。しばらくゆっくりしようと球子は左手を伸ばして石塀につかまると、目を閉じた。その時、遠くの方から母に手を引かれた父の姿がみえたように思えた。今の球子と同じように目を閉じて左手を母にあずけている。穏やかなやさしい表情は、こうやって生きていることがうれしいんだよ、といっている。父さんはね、目はみえないけれど母さんに大切にされて、球子がいて、もういうことはないさ、と父の口が動く。父さんは幸せだったんだね、とつぶやく球子の声に、父と母は一緒にうなずいたよう

うつみ宮土理

文藝春秋

くねり坂

「じゃ、また来週、ごちそうさまでした」
と浅田の側によらずがるようにしてすすいった。
嫁子の足が崩えた。支払えなかったらどうしようと、冷汗がでてくる。手渡された細長い勘定書きは、振呼数をしてやっとみえた。財布の中身全部をだして支払いを終えた。
スチール屋をでて乃木坂を降りると、くねり坂が遠くにみえた。千鳥のマンションから、「夜のマッサージ」に電話を入れなかったから、嫁子を心配して電話の鈴でたの音もついている夜の顔が浮かんでくる。
くねり坂の下にでた、この坂を登れば、体を失めてうずくまっているような「廃墟」がみえる。
今夜はひどく体が重い。
坂の真中で嫁子は立ち止まる。心臓の鼓動が激しくて息が止まりそうだ。しばらくゆっくりしようと嫁子は左手を伸ばして石垣につかまると、目を閉じた。その時、遠くの方から後に手を引かれた父の姿がみえたように思えた。今の嫁子と同じように目を閉じて左手を垣にあずけている。眼やかなやさしい表情は、こうやって生きていることがうれしいんだよ、といっている。父さんはね、目はみえないけれど母さんに大切にされて、もういうことはないさ、と父の口が動く。父さんは幸せだったんだね、とつぶやく嫁子の声に、父と母は一緒にうなずいたよう

うつみ宮土理

文藝春秋

くねり坂

一九八八年九月三十日　第一刷

定価　九〇〇円

著者　うつみ宮土理

発行者　豊田健次

発行所　株式会社　文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三―二三
電話代表(〇三)二六五―一二一一

印刷　凸版印刷

製本　矢嶋製本

万一、落丁乱丁の場合は
お取替致します

© Midori Utsumi 1988　Printed in Japan

ISBN 4—16—310510—7

目次

くねり坂　5
氷の中の涙　41
トマト　73
Uターン　81
温泉町の音　115
双眼鏡のかぐや姫　157
結婚エレジー　191

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

くねり坂

装幀　坂田政則

くねり坂

球子がくねり坂を登るのは夕方七時と決まっていた。

くねり坂の途中までくると球子は立ち止まる。なだらかな勾配でS字を描いているくねり坂を、球子は二、三年前まで一息で登りきることができた。それが今年あたりからS字の真中あたりで立ち止まって、呼吸を整える。もう年齢なんだ、と球子は思った。

四十歳になった途端、白い肉の層が臍を中心に上下に広がって、胃や腿のあたりにも指でつまめる余分な脂肪がついてきた。

球子はくねり坂の真中で左手を伸ばして石の塀にもたれて、しばらくじっと立っていた。目をつぶると、絶え間なく脇を通り過ぎてゆく自動車がするどい音を球子の体にぶつけていく。

息を整え、球子は顔を上げて「東京マッサージ」に向かう。

くねり坂を登りきると、目の前に最近新しく模様替えしたマンションが姿を現す。その並びに工事中のマンションがあった。その間に挟まって「葵荘」がみえた。長いこと雨風にさらされ黒茶けて、今にも倒れそうなのにまだ頑張っている、という風情の「葵荘」は二階建てのモルタル造りだった。「葵荘」は頑固な年寄りだよ、マンション建築反対って頑張っているんだから、と「東京マッサージ」の社長の泉がいったことがある。

「葵荘」の階段に足をのせるとギイという音がした。十回ほど音を出すと二階の狭い廊下にでる。でてすぐの部屋が「東京マッサージ」の控え部屋だった。

「東京マッサージ」のドアを球子は一つ叩く。「あっ、吉野さんだね。いつも時間ぴったりで助かるなあ」とドアの向うでかすれた声がして、泉がやせた顔をのぞかせた。額に髪の毛が落ちている。朝方まで続く仕事を考えて、長椅子で仮眠していたのだろう。

球子が仕事に使う時の名前を「吉野」にした方がいいと勧めたのは泉だ。

「そうだよ、新宿の吉野屋のお嬢さんなんだから、吉野ってさり気なく使いなよ。私だって球子さんが吉野屋の勘当されてるお嬢さんだって知った時は驚いたよ。でも客商売は信用が一番。自分の腰を揉んでくれてるマッサージさんが、新宿の甘味どころの老舗、吉野屋のお嬢さんって知ったら効き具合も違いますよ。あそこの白まんじゅうは旨いからなあ」

と泉は抜いた奥歯が痛いのか、頬に濡れタオルをあてながら顔をしかめて笑った。泉の歯は球子が「東京マッサージ」に入った三年前から少しずつ減ってきている。

「はい、東京マッサージ。毎度ありがとうございます。はい、九時半。承知しました」

電話にでる時の泉は、気どった口調で喋る。声の調子を低くして重々しく口をきく時の横顔は、歯が四、五本抜けたままだということを忘れさせた。

「東京マッサージ」は八畳ほどの板の間に小さなバスと流し台がついていた。

入口のすぐ横に泉の机がある。メモ帳と大学ノート、それに電話が一台のっているだけだ。窓側には古びた皮張りの長椅子が二つ向かい合って並んでいた。客の待ち時間にこの長椅子で仮眠

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

するようにと泉は勧めるが、球子は手で触わると粘りつく長椅子に横になる気にならなかった。太って肉のついた客の猪首にかいている汗や、脚の膝裏のねとねとした皮膚を思いだすからだ。

いつもこの長椅子に横になっているのは、疲れた疲れた、を連発する中年の小園と、入ったばかりの若い高山だった。テレビが好きで控え部屋にいる時は画面に目を向けたままになる高山と違って、小園は何かと球子の素性を詳しくききたがる。

「吉野屋のお嬢さんなんだってね。たいそうな人がマッサージをしてるんだね。吉野屋さんは何人兄弟？　あんたは何番目？　財産もすごいんだろうなあ」

長椅子に寝そべったままで、首だけを持ち上げて口の端にうすい笑いを浮かべて小園は球子にいった。

「吉野屋のお嬢さんも勘当されちゃあおしまいですよ。兄弟のことも忘れました。財産なんてないのと同じですよ。あったとしてもチョボチョボですよ」

と球子は週刊誌のグラビアをめくりながら、気のない返事をした。

あの時もすっと息を吐きだすように言葉がでてきたからよかった、とあとになって胸をなでおろした。

こういう男は苦手だった。最初から球子を疑っている。私は吉野屋の勘当された娘といっているんだからそれを信じればいいじゃないの、と心の中でつぶやく。

小園はそれ以上は聞かなかった。女も四十になると狸だからな、何が本当だかわかったもんじゃないよ、と球子に聞こえよがしにいって長椅子にひっくり返った。

これ以上しつこく小園がきいてきたら、あれをみせてやろう、と球子はアパートの箪笥の小引出しにしまってある指輪を思いだした。あれは二カラットはある。あの指輪をみせたら小園だって私が老舗のお嬢さんだったと信じるだろう、と心の中でほっとする。

「これはよくできたジルコンですよ。よく光りますし、全くしろうとの目ではダイヤと区別できません」

質流れ専門店のおやじに囁かれて買った品だった。

「こういうものが一つあるといざという時に、ほら、これをごらんよっていう証拠になるんですよね」

とおやじの細い目が光った。そっととり上げてくすり指にはめてみた。球子の男のように太くなった指には入らなかった。小指にはめた。白い色を放ってよく光る指輪は球子がはじめて身につけた指輪だった。

こんなふうに幸治にはめてもらいたかった、という切ない思いがあの時胸をよぎったのを覚えている。

指輪を買ったのも幸治が球子のアパートに現れなくなったからだ。今夜こそ、もしかして、という祈る気持で球子は駅前通りを幸治の姿を捜して歩き続けた。

一晩中歩いた日だった。うっすらと白い光が駅前通りを照らし始めた時、シャツのボタンをはめながら男が店の扉を開けた。今日一番乗りのお客さんだ、こんな早くから縁起がいいな、そんなことを言いながら男は球子を店の中に招き入れると指輪の入った箱をとりだした。

幸治にアパートにもどって欲しい。もう一度幸治と暮したい、と幸治のことを考えて指輪をながめていたらいつの間にか小指に指輪がはまっていた。

指輪の支払いは二年続いた。

幸治と別れて五年が経った。

幸治を忘れたいと思って私は変わったんだと、球子は大きく息をすると背筋を伸ばした。

「吉野さん、今夜は八時半が南青山の骨董屋の御主人。十一時が新しい客。高山か私が送迎します」

泉が日報ノートを繰りながらいった。新人の高山はまだ指名客がなかったから、空き時間は球子と小園の送迎を手伝った。

赤坂から青山、渋谷、目黒あたりの金に余裕のある客がマッサージを頼んでくる。球子が「東

京マッサージ」を選んだのも金持の客筋をにらんでのことだった。一時間四千五百円。手数料の三割を泉に支払って手元に残る金は三千百五十円。頑張って一日四人の客をやればいい仕事になった。

「吉野さんはうちの稼ぎ頭ですよ。真面目だし……。あとの連中は入ったり出たりであてになりやしない。まあ末永くよろしくね」

泉は立ち上がって台所へ行き、やかんに火をつけた。

球子が「吉野屋」の娘とさり気なくいった去年あたりから泉の態度が変わった。小園や高山には事務的で素気ないのに、球子には何かと気をつかって顔色を窺う。吉野さんは口がこえているから、と茶菓子の中身が小園たちの前に並ぶ器のものと違っていた。

泉は球子のことをあれこれ聞こうとはしなかった。球子が喋ることにあいづちをうつだけだ。

「東京マッサージ」には今のところ三人のマッサージ師がいる。泉はおそらくこの三人の本名や家族構成を知らないだろう。三人から報告された名前と連絡先をノートにメモしただけで仕事がスタートした。指圧師の免許をとっているのかいないのかもはっきりしなかった。免許は経営者が持っていたらそれでなんとかごまかせるからだ。小園や高山が不意に休むような日は、泉は仕方がないな、今夜は私がマッサージ師だ、と白衣に着替えてでかけることがある。泉の古ぼけた免許証は、ドアを開けて入った壁の上の立派な額に収まっていた。

不思議な商売だと思うことがある。目をしっかり開けてみているのに何もみえないのだ。いや、みようとしないのかも知れない。ただ客の体に触わってマッサージをしている間の客の体温だけは、はっきり伝わってくる。球子の指先から球子の体のエネルギーが客の体の中に入っていく。客の寝息がきこえてくると球子はいつもほっとして心が安らぐ。あの安らぎが欲しくてマッサージをしているのかも知れない。その客も次に会える客かどうかは分からなかった。もう二度と会えない客かも知れなかった。浮草稼業というんでしょうか、と球子はふいと口にでた自分の言葉に苦笑する。浮草だっていろいろある。みじめったらしい浮草には決してなりたくないと思う度に、幸治の顔が浮かんで消えた。みじめったらしい生活、みじめったらしい女が嫌いなんだよ、そういって幸治は出ていった。あの時、幸治の口端に白い泡がたまっていた、と球子は思いだす。今の私は幸治が嫌いな女ではない、別の女に生まれかわったの、と心の中で叫んでみる。するとうつむいて下ばかりみている顔が上がって、背筋が伸びるように思えるのだ。

「吉野屋の勘当された娘」と吉野屋の名前がでてしまったのは、幸治の好物の白まんじゅうを毎晩のように買いに行ったからだ。吉野屋の甘いものが好きだった幸治は、球子が他の店のもので間に合わせようとするとひどく不機嫌になった。そんな時、幸治の前にうなだれて座った、息がつまるような苦しい胸のつかえは、早く忘れてしまいたいと球子は頭を振ってみる。

「吉野屋の勘当された娘なんです」と球子が一言いうと、うつ伏せになっている客のほとんどが、えっと驚いたように顔をひねって球子を見上げる。そして四千五百円のマッサージ代を五千円札一枚だして釣りはいいです、と断った。いつか食事にでも行きましょうよ、と本気で誘う客もいた。そして「東京マッサージ」に個人的な電話をかけてくる。

田畑千秋もそうだった。千秋は二カ月前からの客だった。

「やんなっちゃうわよ。田んぼの中の歌蛙だもんね。田園の歌姫ならきこえがいいのにさ、歌蛙じゃ、まるで田舎者まるだしよ」

「東京マッサージ」から派遣されて初めて千秋のマンションのドアを開けた途端、かん高い声が部屋の奥から球子に飛んできた。なんのことかわからなくてドアのノブを握ったままきょとんとしている球子に、

「あれ、知らなかった？　私、田畑千秋、歌手の。東京マッサージから聞いてきたかと思ってさ」

と、入口の狭い三和土(たたき)につま先立ちになると、

「さ、入って」

と命令するようないい方をした。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c